様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３１０

研究課題名（和文）Lucy M. Boston 研究：音響感覚を切り口として

研究課題名（英文）A Study of Lucy M. Boston: from soundscape perspectives

研究代表者
田中　美保子（TANAKA, MIHOKO）

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：３０３８５３８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：主に4名が個々に或は協同で研究を進めてきた。2013年8月5日から8日に実施したサウンドスケープ（音風景）の実地調査と、2015年12月5日に東京女子大学で行った公開シンポジュウムが特に意義深かった。
前者は、４名全員が英国Hemingford Grey村の現地に集合し、研究協力者(Diana Boston）の協力の下、館と庭及び周辺地域のサウンドスケープを調査し現地でしか得られない一次資料を収集した。また、シンポジュウムでは、研究発表／報告、講演、座談と質疑応答を行い、一般参加者にも、本研究を知らしめる機会となった。
３年間の研究成果をまとめ、共有するため、160頁に及ぶ報告書を編集・制作した。

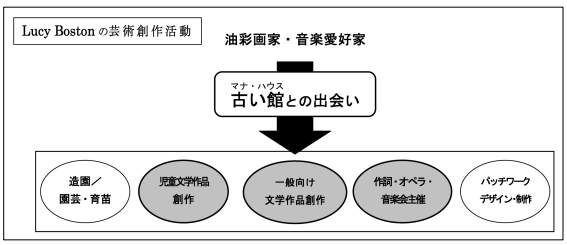
研究成果の概要（英文）：The major four members had worked alone or together to pursue this research project, by occasionally gathering and discussing individual research results over these three years since April 2013. In order to share and make the best use of the whole outcomes, a booklet with about 160 pages were edited and published.
Among many, the joint field work conducted between August 5th and 8th in 2013, and the international symposium held at Tokyo Woman's Christian University were particularly productive in terms of gaining some outcomes. It gave not only academic opportunity to share the products and interests but also stimulated the researchers themselves as well as the public who came to listen. It certainly was a good opportunity to enlighten the public about this unique project with three different academic fields of literature, linguistics, and soundscape.

研究分野：現代英国児童文学研究および翻訳研究

キーワード：Lucy M. Boston研究　サウンドスケープ研究　イギリス児童文学研究　コーパス分析　文学作品における聴覚的特性　総合芸術家

１．研究開始当初の背景

Lucy M. Boston（以下 L. Boston)は、62歳で作家デビューし、14冊の児童書（内6冊がシリーズ）と 6 冊の一般書（自伝、小説、戯曲、詩集）を著した。それまでは油彩の画家であったうえ、かねてより音楽にも深い関心を寄せていたが、彼女の芸術性が豊かに開花したのは40代半ばのマナ・ハウス（900年前にノルマン人が建築）との出会いによる。L. Boston のほぼすべての文学作品は、この古い館を舞台にしたもので、五感（とりわけ聴覚と視覚）に訴える独特の感覚に満ちた世界である。また、文学以外にも、芸術創作活動においても目を見張るさまざまな作品を残しているのだが、その源はすべてこの古い館との出会いにある（下図参照)。



これまで、児童文学作家としての最高の栄誉であるカーネギー賞を受け、英国内でも日本においても高く評価されながら、まとまった評伝が出ていない。これは、L.Boston の多彩な芸術活動についての多角的検討の必要性からくる研究の困難さにあると思われるが、こうした現状は英日文学批評界における大きな損失である。本研究はそれを埋めようとする意欲的で野心的な試みの一環である。

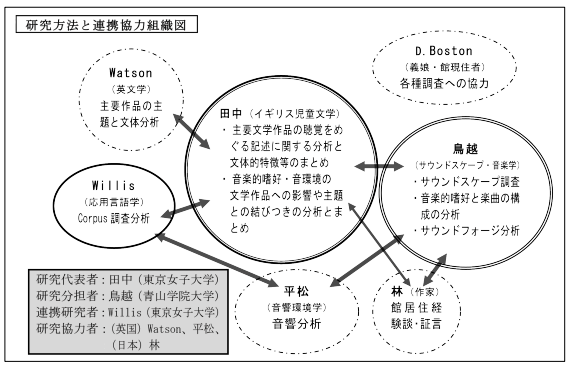
２．研究の目的

上記のような背景を持つ L.Boston（1892–1990）の全体像を「総合芸術家」として多角的に浮き彫りにすることがこのプロジェクトのテーマである。特に「児童文学作家L・M・ボストン」という日本における狭く偏った視点を修正し、彼女の多才でさまざまな芸術活動の現れの一つとして Lucy M. Boston の文学を捉える意義と手がかりを広く世に知らしめる。とりわけ研究の光が当てられることのなかった側面である彼女の音への関心や音楽的体験に焦点をあて、様々な視点からの考察を行うために、文学研究とサウンドスケープ研究とが共同した。そこに、応用言語学の方法論も取り入れて、L.Boston の作品における聴覚的特性を考察することで、彼女の文学において有するその意義を考究した。

３．研究の方法

これまで L. Boston の活動の中でもっとも顧みられることのなかった音楽愛好家としての側面に着目した。L. Boston の音響効果への関心や音楽的体験が彼女の文学に及ぼした影響を多角的に分析することを試みた。その際、L. Boston の文学を支える外的要素と内的要素二側面からまずアプローチし、その共有・摺り合わせを試みた。

具体的には、４名の主要研究メンバーが各自で研究を進めるとともに、年に数度の打ち合わせや意見交換を行い、研究協力者の助けも借りつつ進めた。研究方法と各研究メンバーの連携協力関係を図示すると以下のようになる。



次に、研究方法の詳細を記す。

(1)L.Boston の文学を支える外的要素の抽出

①サウンドスケープ調査：研究メンバーが現地に集合し、L.Boston 邸とその庭園にお

いてサウンドスケープ（音環境）調査を実施した。これは、館や、庭を含めた館周辺の音の持続的録音と聴取、研究協力者で館の現在の管理人であるL. Bostonの義娘D. Bostonや館に縁の深い人たち11名へのインタビューからなる。

②音楽的嗜好の分析：音楽学が専門の研究分担者が、L.Bostonの所有していたレコードから彼女の音楽的嗜好を分析した。また彼女が第二次大戦中に空軍兵士のために館で催していたレコード・コンサートの曲目について調べるために、D.Bostonから許可を得て館に残っている記録簿全部を複写した。これらの一次資料を分析することにより、L.Bostonの音楽的嗜好を考察した。

③単語間の距離の分析：L. Boston の作品の中から代表作である「グリーン・ノウ」シリーズを選び、連携研究者（応用言語学）が Corpus Linguistics の方法で計量的に分析した。それに先立ち、６巻までの全文章テキストをスキャンしてパソコンに取り込んで電子データ化、そのうえで、テーマと関係の深い語句や記述（とくに、音に関するもの）の呼応分析や単語間の距離の計測などを行った。これにより、相互に類似度の高い単語の群化を図った。

(2) L.Bostonの文学における聴覚的表現の内的分析

①主要文学作品中の音や聴覚体験に関する記述の抽出

研究協力者やリサーチ・アシスタントの協力を得て、研究代表者が、「グリーン・ノウ」シリーズ全6巻の全文から、音や聴覚体験に関する記述を抽出した。

②テーマとの結びつきの考察・分析

研究代表者が上記①と各作品のテーマとの結びつきを考察・分析した。

③文献調査

これまでに記述された Boston 邸で聞こえる音に関するものを以下のｉ.とｉｉ.の各種文献から抽出した。

ｉ．文学作品中の音や聴覚体験に関する記述に使用された語彙の抽出と分析：文学作品の中にも「音」や「響き」への言及がしばしば登場し、散文においてもリズムや韻律の美しさが際立っている。これらを考察する手がかりとして、使用されている語彙を研究代表者がリサーチ・アシスタントの助けを借りて抽出し、それを連携研究者がコーパス言語学を用いて分析した。

ｉｉ. L.Boston関連の２つのArchive（作品の草稿・資料、書簡類など）を調査・資料の入手：リサーチ・アシスタントに依頼し、Seven Stories (英国・ニューカッスル)に出向いて、Archive内すべてのL.Boston関連の資料調査を行った。その結果、今後の研究資料として有用なものをデータで複写して入手した。帰国後、それらを今後の分析に使用できるよう、手書きの書簡等の解読・文字入力作業などを行ってきた。

４．研究成果

さまざまな研究活動・成果の中でもとりわけ意義深かったのは、(1)研究開始後初の夏の長期休暇を利用して2013年8月5日～8日に行った館のサウンドスケープ（音風景）の実地調査と、(2) 研究のまとめとして 2015年 12 月 5 日に研究代表者の本務先（東京女子大学）で行った公開シンポジュウム、(3) シンポジュウムの記録を含む研究報告書の発行である。

これらの活動により、貴重な研究資料とデータが入手できたが、それらの分量の膨大さと多面性ゆえに、十二分にそれらを活用した

り分析しきったとはいえない。それはとりもなおさず、L.Bostonの芸術活動とその世界の深さと豊かさを反映しているものでもある。したがって、この３年間の研究活動期間は一つの区切りであるが、本報告は壮大な研究プロジェクトの中間報告であり、いくつもの課題が明らかになった今、ようやく新たなる研究の出発点に立ったとさえ言える。今後、それらをさらに豊かに探索し、成果として結実させていくことにしたい。（それぞれの詳細は、本報告では紙幅に制限があるため掲載することが不可能である。冊子『研究報告（2013-2015年度)』を参照されたい。）

（1）現地でのサウンドスケープ調査

主要研究メンバー４名全員が現地に集合し、館の現管理者である L. Boston の義娘 Diana Boston（ダイアナ・ボストン）の全面的な協力のもと、さまざまな角度から館と庭および周辺地域とそこに行き交う人々のサウンドスケープを実体験すると共に、現地でしか得られない一次資料を収集した。

→今後、L.Bostonの音環境の全容を明らかにするための貴重な資料を得た。

（2）シンポジュウム

上記(1)の現地サウンドスケープ調査を含め、各メンバーが続けてきた研究成果の発表と、共有の場を持った。D. Boston のビデオメッセージ（2015年8月に現地で撮影）を皮切りに、研究代表者の司会進行のもと、３つの研究発表／報告、講演、座談と質疑応答を行った。ルーシー・ボストン存命中に館で暮らしていた研究協力者の林望氏に特別にお願いした講演は、「音」を手がかりにすることで新たに見えてくる世界を具体的に知る、貴重な機会となった。

→L.Boston の芸術活動の全容を捉える手がかりとして、「音」を軸にすることの意義深さが明らかになった。また、サウンドスケープ研究、音響工学、コーパス言語学、文学、というまったく異なる研究領域それぞれからのアプローチが可能になることを実際に確認できたことそのものが、まず大きな成果である。今後は、それぞれの発見を摺り合わせる作業を行い、今後の研究へと繋げていく。

(3)冊子『研究報告（2013-2015年度)』の制作発行

刺激的なシンポジュウムであったこと、今後の研究の土台として活用できる内容に満ちていたこと等から、まず、シンポジュウムの発表や報告と講演内容を活字資料とするために、冊子を作成した。活字化に向けて自らの発表や報告をまとめなおす作業そのものも、各自の研究にとって、さらに意義深い活動となり、シンポジュウムは二重に高い成果を上げたと言える。

また、その後の話し合いの結果、冊子には、シンポジュウムの記録集だけではなく、この３年間に行ってきた日本国内外の研究協力者 Diana Boston や Victor Watson へのインタビューの中から資料として価値の高いものや、Victor Watson 氏から寄せられた論考２本も収録し、研究報告集としていっそう充実させたものを作成した。

→ここに提起された問題をまず検討し摺り合わせることにより、L. Boston の芸術世界を世に知らしめる第一歩となるはずである。（同冊子所収の詳細は以下の５.で報告。）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①Victor Watson（研究協力者）（著）・<u>田中美保子</u>（訳）、古きよき静寂の音：Lucy M. Boston と Green Knowe シリーズの世界（上)、査読（無)、東京女子大学紀要『論集』、第66

巻（２号)、2016 年、pp.289-304。

〔学会発表〕（計４件）

以下①～④は、いずれも、東京女子大学で行ったシンポジュウムでの報告である。

① 鳥越けい子、ザ・マナーのサウンドスケープ 2013 年夏の調査より、ルーシー・M・ボストン公開シンポジュウム、2015 年 12 月 5 日、東京女子大学（東京都・杉並区)。

② Martin Willis、Green Knowe: a quantitative analysis、ルーシー・M・ボストン公開シンポジュウム、2015 年 12 月 5 日、東京女子大学（東京都・杉並区)。

③ 林望（研究協力者）ザ・マナーの音をめぐる追憶、ルーシー・M・ボストン公開シンポジュウム、2015 年 12 月 5 日、東京女子大学（東京都・杉並区)。

④ 菅谷美佳子（リサーチ・アシスタント)、グリーン・ノウ・シリーズにおけるボストンの環境意識の変化、ルーシー・M・ボストン公開シンポジュウム、2015 年 12 月 5 日、東京女子大学（東京都・杉並区)。

〔図書〕（計１件）

田中美保子（監修)、東京女子大学田中美保子研究室（編集発行)、Lucy M. Boston 研究：音響感覚を切り口として　研究報告(2013-2015)、2016 年、pp.1-162。(以下に、同書所収の上記のシンポジュウム報告の論文、および別途書き起こした論考のページ数を同書記載順に記す。)

①Victor Watson、A Very Old and Wonderful Silences: Lucy Boston & The *Green Knowe* Series、pp.12-36。

②Victor Watson、‘Sorrow and Joy in one Breathful’: The Other Fiction、pp.37-61。

③田中美保子、耳を傾けて：ルーシー・M・ボストンの芸術活動、pp.62-74。

④菅谷美佳子（リサーチ・アシスタント)、グリーン・ノウ・シリーズにおけるボストンの環境意識の変化、pp.97-105。

⑤ Martin Willis、Green Knowe: a quantitative analysis、pp.106-118。

⑥鳥越けい子、ザ・マナーのサウンドスケープ 2013 年夏の調査より、pp.119-131。

⑦ 林望（研究協力者)、ザ・マナーの音をめぐる追憶、pp.132-150。

〔その他〕（講演招待）（２件）

①田中美保子、イギリスの庭の物語（東京女子大学同窓会児童文学連続講座 2015 年度第一回)、2015 年 10 月 17 日、東京女子大学（東京都・杉並区）

６．研究組織

(1)研究代表者

田中美保子（TANAKA, Mihoko）

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：30385380

(2)研究分担者

鳥越けい子（TORIGOE, Keiko）

青山学院大学・総合文化政策学部・教授

研究者番号： 60237162

(3)連携研究者

ウィリス、マーティン（Willis, Martin）

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：80246462

(4)研究協力者

平松幸三（HIRAMATSU, Kozo）

京都大学名誉教授

林望（HAYASHI, Nozomu）

国文学者、作家

ワトソン　ヴィクター（Watson,Victor）

Cambridge 大学 Homerton College 元教授

ボストン　ダイアナ（Boston, Diana）

ボストン記念館「ザ・マナー」管理人

菅谷美佳子（SUGAYA,Mikako）

筑波大学大学院人文社会科学研究科

一貫性博士課程学生